

存在動詞「いる」「おる」にみる 九州本島部における待遇表現

塩川 奈々美ⁱ 清水 勇吉ⁱⁱ 岸江 信介ⁱⁱⁱ

Honorific Expressions of Kyushu
Based on Substantive Verbs, *iru*, *oru*
SHIOKAWA Nanami SHIMIZU Yukichi KISHIE Shinsuke

Abstract

In this paper, the traits of the honorific expressions of Kyushu are comprehensively analysed by comparing the results of a Kyushu Dialect Investigation (KDI). The KDI was conducted by the Japanese Language Study Room in Tokushima University using the results of the GAJ. Through linguistic mapping showing the geographical distribution of variations of the substantial verbs, *iru*, *oru*, it was found that the honorific expression forms in Kyushu can be mainly classified into five patterns: (a) *oru* and *orimasu*, (b) *orassharu*, (c) *orasu*, (d) *onnasaru*, (e) *oiyasu* and *oiyaru*. In addition, the trait patterns found to have each distribution in Kyushu which generally mirrored the results of the GAJ investigations conducted about 30 years ago. However, regional differences in the group *orassharu* gathered around Western area of Fukuoka Prefecture are changing. Furthermore, the differences in the levels of each honorific form are comprehended generally.

ⁱ Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Tokushima University.

ⁱⁱ Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (PD), Tokushima University

ⁱⁱⁱ Institute of School of Integrated Arts and Science, Tokushima University

1. はじめに

日々の言語行動において相手を言葉でどのように待遇するか—その表現形式は地域によってさまざまである。本稿では、九州方言における存在動詞「いる」に注目し、その形式のバリエーションと場面差における形式上の敬意差について分析をおこなう。分析をおこなうにあたり、先行研究となる国立国語研究所編『方言文法全国地図 第6集』（2006、以下『GAJ』と表記する。）の第281図、第282図、第283図、第284図との比較をし^{iv}、『GAJ』と徳島大学日本語学研究室で実施した「九州調査」の結果からみえる「いる」諸形式の地理的分布の特徴や、形式上の敬意差について明らかにする。

『GAJ』は本稿に関する主要な先行研究の一つであるといえるが、調査対象地域が日本全国と広範であることから、そこから読み取れる凡例の分布状況は大まかなものであり単純な比較しかできない。また、九州地方に特化した調査研究である『九州方言の基礎的研究 改訂版』（1991、以下『九方基』と表記する。）では存在動詞「いる」の項目が扱われておらず、九州地方における「いる」の運用状況や敬語表現と組み合わさった形式については記述面を参照するよりほかない。これらのことから、「九州調査」の存在動詞「いる」に関する調査結果を言語地図化し、分布の状況を報告することは過去の先行研究の補完、裏付けをするのに有効であるといえる。紙幅の都合上、自由記述で得られた回答全てを凡例として取り上げることはできないが、「九州調査」から得られた存在動詞「いる」の形式の分布状況、場面差からみられる形式上の敬意差についての概観をおこなう。

2. 調査概要

調査対象地域として九州本島部、およびその周辺諸島部にて調査票を送付する通信調査を実施した。調査対象者は調査時点で65歳以上の生え抜き^vとしており、性別に関する制限は設けていない。主要なデータの調査期間は2011年7月～9月だが、その際に収集しきれなかった地点については現在も補填すべく、郵送留め置き調査法も加え継続調査をおこなっている。2014年10月28日時点での有効回答数は613件である。以下に回答者の出身県を表にして示す。九州本島部における概観をつかむため、本稿では有効回答のうち周辺島嶼部の結果を除いた544件のみを分析対象とする。

^{iv} 図1は『GAJ』第281・282図、図2は第283・284図の結果の略図である。

^v 通信調査の性格上、回答者の生年については厳密に守られていない。2014年10月28日時点における最も若い回答者は1960（昭和35）年生まれとなっている。

表 1 回答者情報

	大分	福岡	長崎	熊本	佐賀	鹿児島	宮崎	合計
有効回答数	79	95	80	92	60	121	86	613
分析対象	79	95	53	92	60	79	86	544

調査全体の総項目数は語彙、文法を含む 130 問である。そのうち、本稿で扱うのは存在動詞「いる」を用いた疑問表現「いるか」の項目である。疑問表現「いるか」に関しては、相手の立場が目上か同等かの場合面差を問うために 2 つの質問（項目 96、項目 97）を設けており、質問文はそれぞれ次の通りである。

〔項目 96〕近所の知り合いの人にむかってやや丁寧に「あしたは家にいるか」と聞く時、「いるか」のところをどのように言いますか。

〔項目 97〕では、この土地の目上の人にむかって、非常に丁寧に明日は「明日は家にいるか」と聞く時、「いるか」のところをどのように言いますか。

また、項目 96、項目 97 はそれぞれ全国調査の結果が『GAJ』第 281 図、第 282 図、第 283 図、第 284 図にまとめられている^{vi}。各項目の質問文^{vii}は以下の通りである。

〔第 281 図〕いますか（B 場面）——一般動詞——

この土地の目上の人にむかって、ひじょうにていねいに言うときはどうですか。

〔第 283 図〕いますか（A 場面）——一般動詞——

近所の知り合いの人にむかって、ややていねいに「今日は家にいますか」と聞くととき、「家にいますか」のところをどのように言いますか。

3. 九州本島部における存在動詞「いる」

以下では『GAJ』にみる九州本島部の調査結果と徳島大学日本語学研究室で実施した「九州調査」の結果比較を行う。まず、『GAJ』からわかる「いる」の諸形式について触れたのち、「九州調査」の結果について述べる。「九州調査」の結果は図3、図4に示す。

図3、図4の凡例を整理する際は、第二回答までを採用することにした。第三、

^{vi} 『GAJ』では調査結果について一般動詞と敬語動詞の凡例を分けて地図化しているが、図3、図4では一枚の地図にまとめて反映させている。

^{vii} 項目 282、284 の質問文は項目 281、283 とそれぞれ同じものである。

第四回答まで記入されているものもあったが、実際の運用に即したものでない回答を採用する可能性が高くなるため、上記の採用基準を設けた。このほか、アスペクト表現の含まれる凡例も地図に反映させているが、これは話者の回答を尊重した結果であり、地図に示すことでアスペクト表現が出現しやすい特徴があることを指摘するものではない。

3.1 『GAJ』にみる存在動詞「いる」の諸形式

『GAJ』第281・282図の統合図を図1、『GAJ』第283・284図の統合図を図2にそれぞれ示す。なお、全凡例を示すものではなく略図とした^{viii}。

『GAJ』第283図で確認される主な形式として5つの凡例、福岡県、大分県、熊本県、宮崎県の一部等で広く分布するオル類〈oru-ee, ka, kaa, kaaなど〉^{ix}、福岡県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県にかけて分布するオリマス類〈orimasu-ka, kaa, naa〉、福岡県南部と熊本県に分布するオンナハル類〈onnaharumasu-ka〉、〈onnaharudesu-ka〉、〈onnahaddesu-ka〉、〈onnasan-no〉、鹿児島県全域と宮崎県南部に分布するオイヤス類〈oijasu-ka, kaa〉、長崎県と宮崎県に確認されるオラス類^x〈orasu-ka, kanai, kanasi, ke, na, no, nomaai〉が挙げられるだろう。『GAJ』第281図では敬意度を上げた表現を問うているため、凡例の種類や分布の範囲が『GAJ』第283図とは異なる。しかしながら形式のバリエーションは類似した様相を呈している。

オルは五段活用動詞「居る」である。『GAJ』第283図にみるオル類の分布は、九州地方に限らず西日本を中心に広範囲で確認されている。その東端地域は新潟県北部、長野県西部、愛知県東部である。文末表現における多少の敬意差はあるといえるものの、「近所の知り合い」程度の人物に対する敬意表現としてはニュートラルなものである。

またオリマス類は、五段活用動詞オルに、丁寧体マスが付いたものであることがわかる。『GAJ』第283図では、九州地方、四国地方以外にも、北海道や東北地方、関東地方などのイマス類の分布域とされる地域においてもオリマス類の使用は認められ、共通語として全国的な範囲で用いられている表現形式であることがわかる。

^{viii} 凡例について、表示範囲の都合上明確に示すことができていない。それぞれ、図3、図4を参照されたい。

^{ix} 『GAJ』の凡例オル類の分類内容と、図3、図4が示す凡例のオル類の分類内容は厳密には同じではないが、どちらも文末詞に関わらず動詞部基準でまとめたものである。

^x 宮崎県の凡例として〈oransu-ka〉が含まれる。

オンナハル類の分布は、福岡県南部と熊本県全域に集中している。『九方基』によると、熊本県の主要な敬語表現の1つとしてナハルが挙げられ、常態敬語とされるスと共に「基本的なもの」として用いられており、待遇価値はスより高いという。『GAJ』第283図で確認されるオンナハル類はいずれも丁寧体デス、マスを伴っている。福岡県南部にみられるオンナサンノは、オンナハルノの出自となるオンナサルのルが撥音化したものであり、形式はオンナハルと同様の系統である。

鹿児島県と宮崎県南部（鹿児島県と隣接する地域）では、オイヤス類がまとまった分布を示している。『九方基』の鹿児島県岡児ケ水方言に関する記述を引用すると、

(6) ～ヤンス・～ヤス（尊敬）＜青以上老ほど多・上＞終止・連体形欠く。

○アスビ キヤハン カ。遊びにいらっしやいませんか。

となっており、老年層を中心世代として使用されている比較的古い形式であることがわかる。また、木部（1997）に「「リ・ル・ニ」はイ音化する。」とあるように、動詞部のオルがオイとなるのは鹿児島県を中心とする南九州の音韻的特徴である。

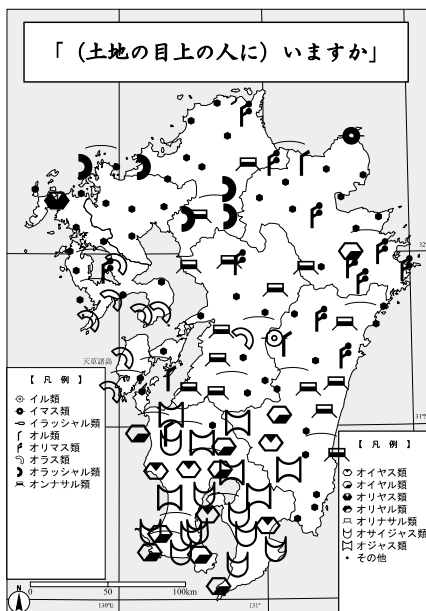


図1 『GAJ』第281・282統合図

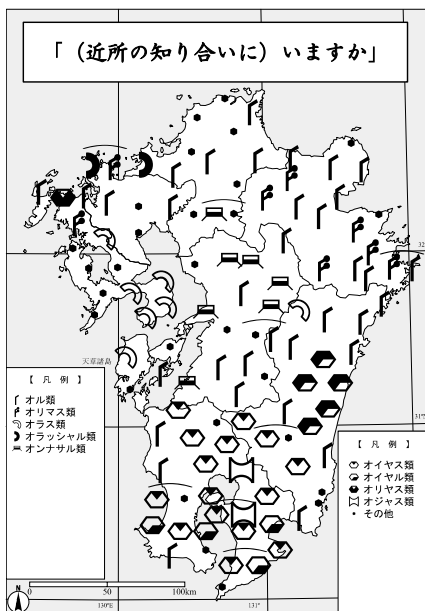


図2 『GAJ』第283・284統合図

3.2 「九州調査」にみる存在動詞「いる」の諸形式

図3, 図4においてみられる主要な形式として大きく5つが挙げられる。佐賀県, 長崎県, 熊本県を中心とした有明海沿岸地域に分布するオリナサル類, 大分県, 長崎県, 熊本県, 福岡県, 佐賀県, 宮崎県の一部など広く分布するオル・オリマス類, 佐賀県, 長崎県を中心に熊本県, 宮崎県にもみられるオラス類, 鹿児島県全域と宮崎県南部といった九州南部に広がるオイヤル・オイヤス類であり, 福岡県の西部に集中的な分布を示し, 県南部にも1件の確認ができるオラッサル類についても注目される。

まず『GAJ』第283図の結果では北部から南部にかけて広く分布を示したオル・オリマス類について, 本調査でも類似した傾向で分布していることがわかる。近所の知り合いに対する場面では, 終止形もしくは連体形のオルに疑問の文末助詞を伴うオル類が大分県を中心に北部九州全域に分布している(図3)。しかし, 敬意の求められる場面になると, 大分県を除く地域では方言の助動詞や補助動詞を下接させている地域や, 方言の敬語動詞を用いる地域があり, 多様な敬語形式の分布が確認できる(図4)。ただし, 大分県ではオンサル, オラレルといった敬語形式も確認できるものの概ねオリマス類であり, 図3の結果と照らし合わせれば, 周辺地域より比較的単純で共通語的な敬語運用がなされているといえる。

佐賀県西部から長崎県全域にかけて広がるオラス類は, 島原・天草を挟み対岸の熊本県にも分布が確認できる。また, 宮崎県西臼杵郡付近でも集中的に確認された。『九方基』では「敬意は概して低い」敬語であるとされる一方で, 熊本県天草や宮崎県西臼杵郡では敬意が高く上品な敬語として用いられているという地域差があることを指摘しており, 図3, 図4よりそれらの地域は依然として同様の分布状況を維持していることがわかる。藤原(1997c)はこのラス敬語について, 「尊敬表現法助動詞シャル(→サッサル)の極端な変化形式が前の動詞語尾のラにつづいたもの」とありとし, 「九州弁の肥筑地方でよく聞こえ, 人に「ラスことば」などといった把握がなされてもいる。」と言及している。オラス類のまとまった分布は福岡県西部のオラッサル類とも連続体を成しており, 派生語としての関連性をうかがわせる。『GAJ』では, 第281図, 第283図ともにオラス類は長崎県と宮崎県の一部地域でしか確認できなかったが, 「九州調査」の結果からその分布域がより詳細に示された。さらに, 近所の知り合いに対する場面では盛んに用いられる結果が示されていたにも拘わらず, 敬意度の高い表現が求められると限られた地域でしか出現していないことも明らかである(図4)。ここからオラス類が用いられる地域の広さと, 形式上

の敬意の低さを確認することができる。

凡例数としては多くはないものの、福岡県西部において集中しているオラッシャル類についても触れておく。オラッシャルという形式は、五段活用動詞オルの未然形に尊敬の助動詞シャルがついたものである。藤原(1997b)はシャルについて「相手がたの動作についてのややかるい尊敬気分をあらわすもの 今はずたれぎみのことばでおのずから古風でもある」としている。この表現形式は九州地方においては局地的だが、『GAJ』第281図では中部地方や北陸地方、東北地方にも分布が確認されており、古くは広い範囲でよくおこなわれていただろうことが読み取れる。本調査の結果におけるオラッシャル類は、近所の知り合いの場面から土地の目上の人の場面にかわると、その分布域を拡大させている。加えて、図4でオラッシャル類が現れた地点は図3ではオラレルやオンサルといった形式が分布していることがわかる。これらのことから、分布域においては形式上の敬意差としてオラレルやオンサルよりも丁寧な表現として考えられていることが明らかとなった。

最後に、「九州調査」の本項目(項目96, 項目97)において、最もまとまりがあり、明瞭な分布の偏りを示したのが、鹿児島県と宮崎県南部に現れるオイヤル・オイヤス類である。前述したように、南九州においてはオリがオイと発音されることが音韻的特徴として挙げられ、これによりオイとオリが非常に近い形式であることがわかる。『宮崎県方言辞典』(1979)による宮崎県内の分布域は、「児湯郡。西都市、宮崎郡、宮崎市、宮崎市櫛(7)。」とされる一方で鹿児島県についてはほぼ全域が分布範囲である。『九方基』では九州南部でおこなわれるヤルについて「いくらかの親愛感を伴って、日常頻用される。」と記述されている。また、ヤルの出自は「オ……アル」敬語であるとし、このほか「オ……アル」由来のものとして「オジャル」を指摘した。「オ……アル」の色濃い分布は、『GAJ』第283図でも盛んであることがわかる。上村(1998)は「南部の薩隅では、助動詞は「おーある」系の(オ)読ミヤル・読ミヤイ申ス・読ミヤ(ン)ス式が唯一の尊敬助動詞と言いたいほど圧倒的な勢力がある。」と述べており、図1から図4すべての調査結果でそれを裏付ける分布を示す結果となった。また、図1、図2を比較すると、図1では場面差があることからオサイジャス類が盛んである。形式上の敬意としては、日常の待遇表現として多用されているヤル、ヤンスよりも丁寧な表現であり、「九州調査」の結果も『GAJ』と同じように、目上の場面ではオジャス類、オサイジャス類が現れている。

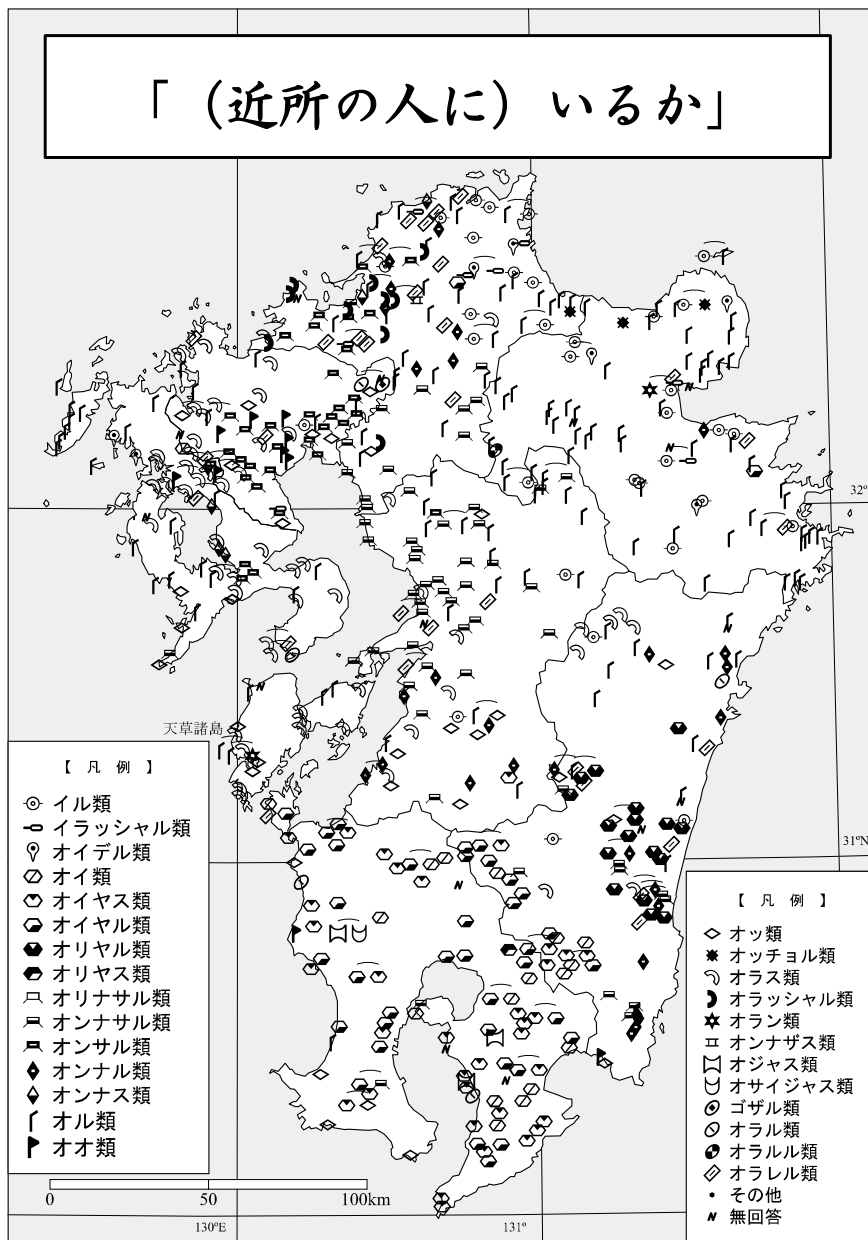


図3 「（近所の人に）いるか」

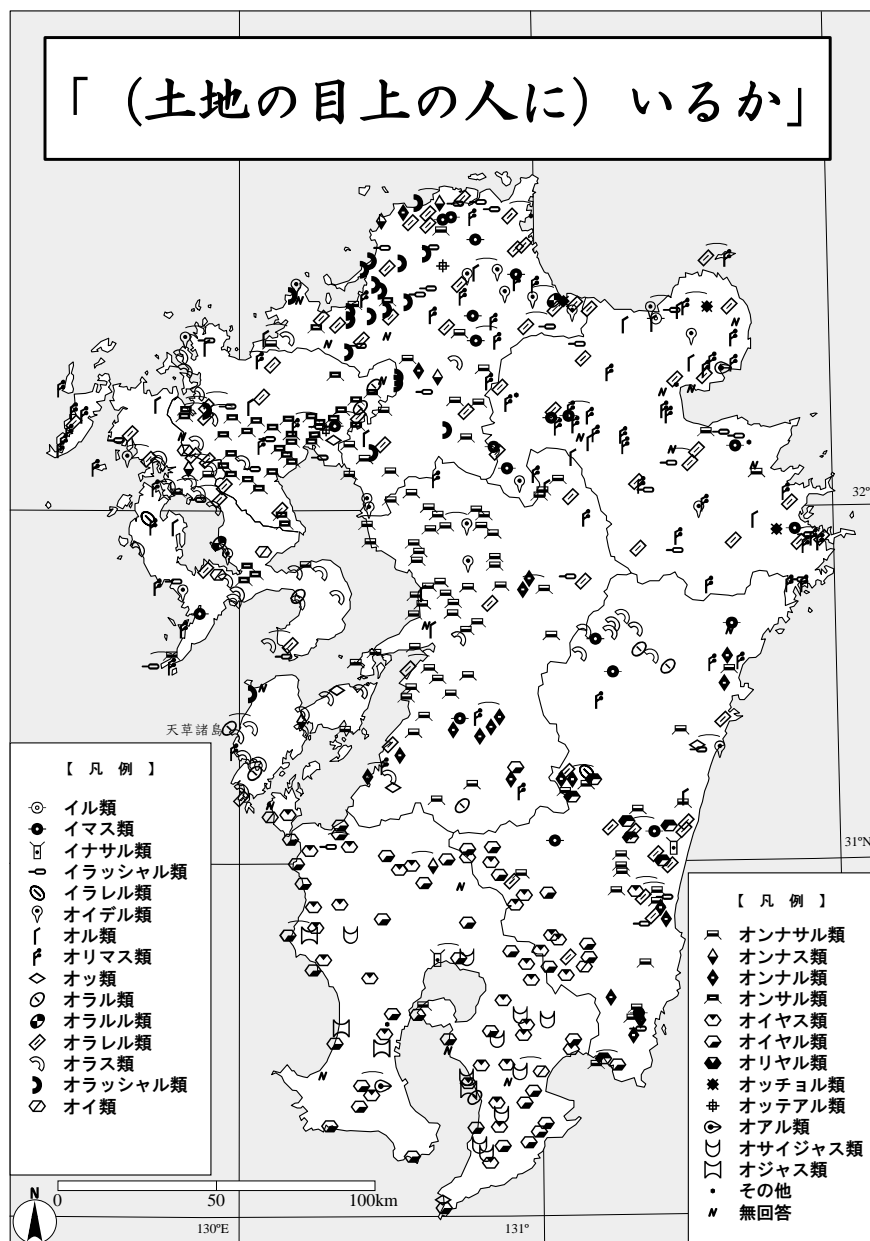


図4 「（土地の目上の人に）いるか」

4. おわりに

本論文は、「九州調査」の結果と『GAJ』とを比較することによって、存在動詞「いる」にみられる九州本島部の待遇表現について、その特徴の概観を試みたものである。

「九州調査」の結果を言語地図化することによって、九州本島部における存在動詞「いる」の主要な形式は、オル・オリマス類(i), オラッシャル類(ii), オラス類(iii), オンナサル類(iv), オイヤス・オイヤル類(v)の5つであることが明らかとなった。また、各形式はそれぞれ一定の分布域を有しており、その分布の様子は30年以上前の調査結果である『GAJ』と概ね合致することがわかった。しかしながら、オラッシャルについては『GAJ』とは異なった分布状況を示し、福岡県西部を中心におこなわれていることが判明した。さらに、図3と図4の結果比較を通して、場面差による使い分けの状況から、敬意差についてその特徴の概観・把握ができた。

言語地図を作成し分析をおこなう以上、すべての回答形式を取り上げることは難しく、今回触れることができなかった形式が多くあることは明らかである。調査結果を論文化する上で、記述的な論述を展開し、より多くの用例を紹介する必要があるだろう。また、今後は形式面以外にも実際の運用面を踏まえた調査が求められる。通信調査の結果を補足する意味でも、調査する項目を厳選し面接調査を重ねたい。

参考文献

- 上村孝二(1998)『九州方言・南島方言の研究』秋山書店
 神部宏泰(1992)『九州方言の表現論的研究』和泉書院
 木部暢子著、平山輝夫編者代表(1997)『日本のことばシリーズ 46 鹿児島のことば』明治書院
 九州方言研究会編(1991)『九州方言の基礎的研究 改訂版』風間書房
 国国語研究所編(2006)『方言文法全国地図 第6集』財務省印刷局
 尚学図書(1989)『日本方言大辞典(全三巻揃)』小学館
 東条操監修、日本方言研究会編(1964)『日本の方言区画』東京堂
 橋口満(1987)『鹿児島県方言辞典』桜楓社
 原田章之進(1979)『宮崎県方言辞典』風間書房
 平山輝男編(1997)『日本のことばシリーズ 40 福岡県のことば』明治書院
 藤原与一(1997a)『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—(上巻)』東京堂出版

藤原与一（1997b）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—〈中巻〉』
東京堂出版

藤原与一（1997c）『日本語方言辞書—昭和・平成の生活語—〈下巻〉』
東京堂出版

藤原与一（2000）『続昭和（→平成）日本語方言の総合的研究第五巻 日本語
方言文法』武蔵野書院